

[資 料]

## イルカ介在活動を通じた癒しのまちづくり

—和歌山県田辺市にある第三セクターの取り組みより—

川 乗 賀 也<sup>1</sup> 相 良 陽一郎<sup>2</sup>

### 1. はじめに

近年、過疎に悩む地方都市では観光資源の開発やご当地キャラクターを用いてPR活動や、さまざまなイベントを企画し来訪者の獲得に力をいれているが、安定した来訪者の獲得が難しいのが現状である。ユネスコに登録された世界遺産についても登録年に来訪者がピークを迎え徐々に減少しているところも少なくない。重要なのは再来訪者の獲得である。

日本観光協会(2010)は観光地において、再来訪者は安定的な交流人口確保につながり、各地域の観光振興を持続的なものにしていくに当たって、きわめて重要であると述べている<sup>1)</sup>。さらに、再来訪者は文化、歴史、健康といった複合的な満足度を観光地に求めており、次第に現地の日常を重視するようにシフトしていくと報告している。

再来訪の要因として山口(2012)は、自然環境は人々に好感を持たれていることから、観光客が観光地において美しい自然環境を見たときに、感激し、満足感を持つと言うことが推測できるだろう<sup>2)</sup>、と述べている。これらのことから、来訪者が観光地においてリピーターとなる要因として、満足感が大切であると考えられる。

したがって、これらの点を十分にアピールすることが来訪者の獲得には重要であると思われる。また、来訪者の満足欲求は日ごろ満ち足りない部分を欲するものと思われるが、物質的なものだけではなく精神的なものも存在すると思われる。例えばストレスが溜まると、それを発散したいという欲求が生じる。

職場におけるメンタルヘルス対策に関する調査(2012)によると、6割弱の事業所でメンタルヘルスに問題を抱えている正社員がいるとしており、そのうちの31.7%の事業所は、3年前に比べてその人数が増えた<sup>3)</sup>、と報告している。国の対策としては2015年には労働安全衛生法を改正し、メンタルヘルス不調に陥るリスクを事前に低減させることを目的として、従業員が50人以上の職場でのストレスチェックが義務づけられた。

このようなストレス社会を反映してか、まちを歩いていると動物と触れあえることをテーマとしたカフェが目にとまるようになった。触れあえる動物は猫、フクロウ、ハリネズミなど主に店舗での飼育が容易な小動物が多い。これらの店舗を訪れた客の感想として「癒された」、「落ち着いた」、「安心した」などの癒しや心地よさに関する回答が得られた<sup>4)</sup>と報告しており、訪れる客もこれらの癒し効果を求めていると考えられる。このような時代背景の中で手軽に癒しが得られる場所として、こうしたカフェが受け入れられているの

1 岩手県立大学

2 千葉商科大学

ではないだろうか。

同様に、動物を使いストレスが軽減するなどの癒しを用いたアニマルセラピーにも関心が高まっている。アニマルセラピーは目的などにより、おおまかに動物とふれあうことによる情緒的な安定、レクリエーション・QOLの向上等を主な目的とした動物介在活動と、医療の現場で、専門的な治療行為として行われる動物を介在させた補助療法である動物介在療法に分けられる。このアニマルセラピーに使われる動物は犬、猫、イルカなどあるが、場所を選ばず飼育も容易という観点から日本では犬が多く使われており報告も多い<sup>5)</sup>。その中でも、心身の健康増進や疾患の治療を行うために、一部でイルカが利用されることがある。川乗ら(2015)はイルカと一緒に泳ぐことで被験者の主観的な気分が有意に改善されたことを報告し<sup>6)</sup>、ストレス解消につながることを示唆した。このように動物とのふれあいは、近年増加しているうつ病患者への効果<sup>5)</sup>も期待されていることから、今後ますます注目されると考えられる。

ところで、上記の問題を検討する上で非常に示唆に富む事例がある。それは和歌山県田辺市におけるまちづくり事業「ビーチサイドドルフィン」である。田辺市は県南部に位置し、過疎に悩む自治体の1つである。田辺市にある第三セクターではまちづくり事業の1つとして、海水浴場に隣接する栈橋に生簀を設置し、来場者にイルカを観察する、イルカにタッチする、生簀に入ってイルカと一緒に遊泳する、という3つのプログラムを夏季限定の有料イベントとして提供している。これらのプログラムは来場者にとって日ごろのストレスを解消する機会となり得る。したがって、「ストレスケア」や「癒し」をテーマとしたまちづくりは過疎地域や観光客の減少に悩む地方にとっては再来訪者を獲得するための大きな宣伝材料であると考えられる。

本稿は和歌山県田辺市にある第3セクターが行っている、まちづくり事業の1つである「ビーチサイドドルフィン」に着目し、来場者のイルカに対するイメージから再来訪要因を検討した地域振興の実践事例報告である。

## 2. 方法

実施場所は田辺市にある扇ヶ浜海水浴場に設置されている生簀で、そこには2頭のマダライルカが飼育されている。調査対象者は上記の2頭のイルカとふれあうために来訪した成人であった。

実施時期は平成28年8月5日から10日の6日間であった。まず、研究の趣旨を文書で説明し成人であることを確認してから、調査票を会場の入口で配布し協力を依頼した。同意が得られた来場者に性別、職業(社会人、学生、その他)、およびイルカとのふれあいに期待することについて自由記述で回答を求めた。

自由記述については、テキストマイニングソフトKH Coder 2(安定版)を使用し、記述内容から得られた単語を抽出し、出現数の多い単語を特定することによって、来場者がイベントに期待していることについて分析を行った。

次にビーチサイドドルフィンが実施されている海水浴場の来場者数の年次推移について田辺市役所観光振興課が統計を取っているため、記録を取り始めた平成16年から平成29年までのデータ提供を依頼した。

なお倫理的配慮のため、本調査は岩手県立大学倫理審査委員会の審査を経てから実施された。

### 3. 結果

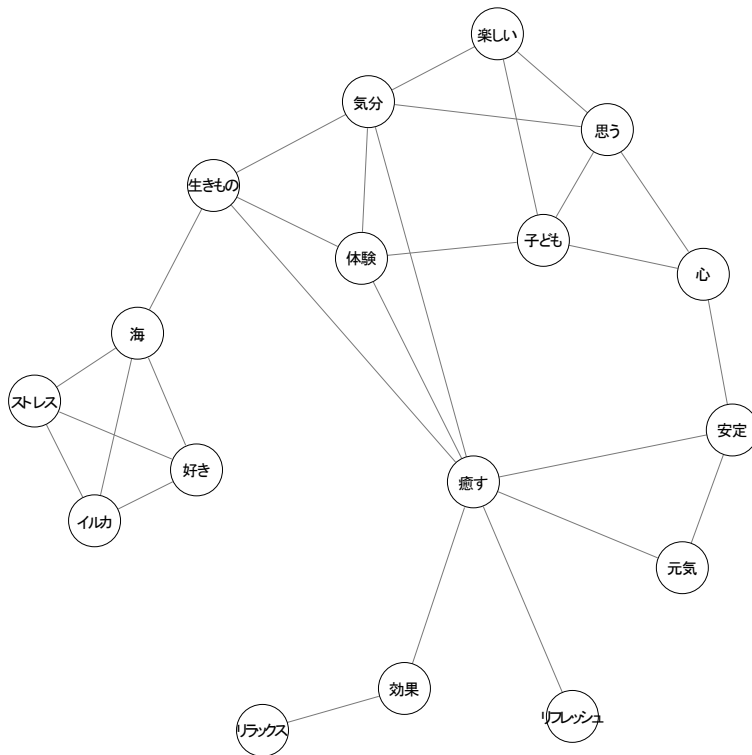
調査の趣旨に同意した参加者は150名で男性41名、女性71名、未記入38名であった。職業は社会人148名、学生1名、未記入1名であった。自由記述への記入協力者は101名、未記入49名であった。

自由記述は最も長いもので、「外国では心を閉ざした子どもたちと交流することでその子どもたちが前向きになれるというのをTVで見たことがあります。何か目に見えない心の会話が出来るとだと思ってます。」のように82文字であった。また、最も短いものは「癒し」といった2文字であった。また、分析の際には「癒し」、「いやされる」、「癒す」のように同じ意味で表記の仕方が異なる語については同じ単語として抽出した。

図表1は自由記述の中で出現数が多かった単語上位15位である。最も多かった単語は「癒す」で2番目以降の単語と大きな差がある。次いで「リラックス」、「楽しい」といった単語が使われていた。図表2は自由記述の中で用いられた、それぞれの単語の関係性を示した共起ネットワークである。これは特定の語と関連が強い語に関し、視覚的なネットワークを描くことができる。中心にあるのは「癒す」であり「気分」、「効果」、「リフレッシュ」、「元気」、「安定」、「体験」、「生きもの」に直接つながっており、癒しにまつわる単語との関連が深く、参加者には気分の改善をイベントに求めている様子がうかがえた。こ

順位	抽出単語	出現数
1	癒す	44
2	リラックス	11
3	楽しい	9
4	気持ち	9
5	安定	6
6	心	6
7	効果	6
8	気分	5
9	やさしい	5
10	ストレス	5
11	子供	4
12	体験	4
13	元気	3
14	リフレッシュ	2
15	好き	2

図表1 自由記述の出現単語



図表2 自由記述の共起ネットワーク

これらのことから、精神的な気分の改善を期待していることが分かる。

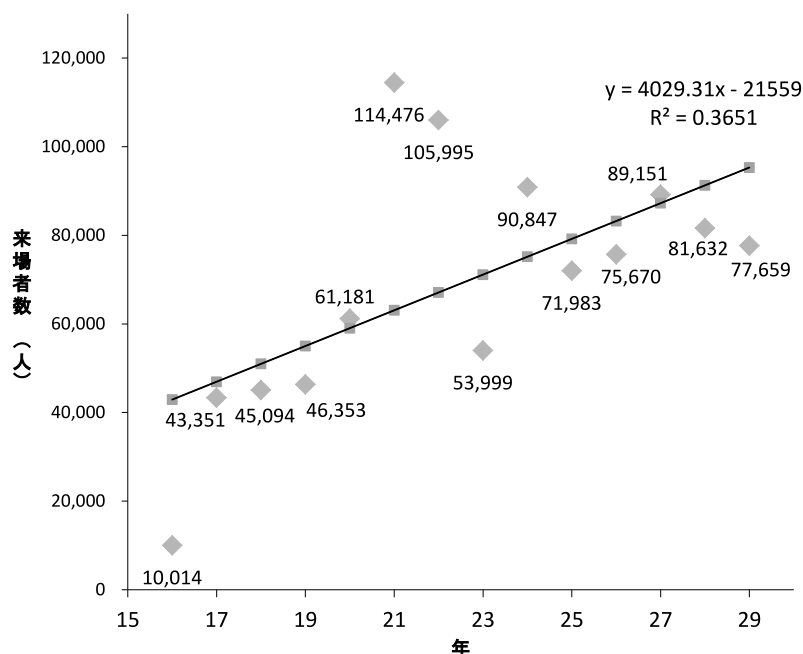
次に海水浴場への来場者の年次推移について、ビーチサイドドルフィンを開始する前年の平成19年では46,353人であったが、開始初年度の平成20年は61,181人と約1.3倍に来場者が増加した。さらに、イベント開始から2年目の平成21年に114,476人とピークを迎え年度により増減はあるが回帰分析の結果、来場者は増加しているといえる ( $b=4029.31$ ,  $t=2.63$ ,  $p<.05$ ), 図表3)。

#### 4. 考察

##### (1) 自由記述の分析

本調査の参加者について性別についての未記入が38名と多い。ビーチサイドドルフィンは有料のイベントであるため厳密な研究被験者として統制することが難しいのが現状である。しかし、実際の来場者としての生の声を聞いたデータとして貴重であると考えられる。また、全体としてイルカとのかかわりを求めるイベントであるため女性の参加者が多いという現状がある。

図表1より自由記述で最も多く出現した単語は「癒す」であり、次いで「リラックス」、「楽しい」という気分が落ち着いたり、高揚したりという精神面についての出現数が目立った。これは来場者がイベントに対して期待していることを表現していると思われる。図表



図表3 海水浴場の来場者年次推移

2では「癒す」から直接つながっている単語は「気分」、「効果」、「リフレッシュ」、「元気」、「安定」、「体験」、「生きもの」といった気分の改善に関連する用語が多い。これらの単語は「癒す」と関連して使用されている単語を表現しているため、多くの来場者はイベントに参加することによって癒しといった気分が改善することを期待していると考えられた。この自由記述はイベントの参加前に期待することとして記載されたものであるが、同じフィールドで調査した堀内ら（2017）の研究によるとビーチサイドドルフィンの参加前後で気分の変化を調査した高揚感、落ち着き感、否定的感情において有意な改善がみられた<sup>7)</sup>、と報告している。

以上より、来場者はビーチサイドドルフィンに精神的な気分の改善を求めて参加しており、参加することによって気分が改善されたものと考えられた。

## (2) ビーチサイドドルフィン実施後の海水浴場への来場者年次推移

ビーチサイドドルフィンの会場である海水浴場の利用者は、イベントが行われるまでは毎年1~4万人前後であった。しかし、イベント開始初年度の平成20年には6万人を超え、その翌年には114,476名とピークを迎える。これは2年目になって来訪者によるSNSでの情報発信やテレビの情報番組による効果が大きかったと思われる。平成23年には5万人台に減少するが、これは東日本大震災があり海に対する畏怖やイベント参加に対する自粛ムードが影響したものと推測される。その後は7万人から8万人台を推移しイベントを開始する以前と比較して約2倍の来場者が順調に来訪している。

このような観光地において安定して来訪者を獲得するには再来訪者が重要である。先に

も述べたようにリピーターとなる要因として来訪者が観光地において満足感を得られること。また、当該地域の文化、歴史、まちなみ、健康といった点に惹かれていると言われていたため、イベントの参加者は精神的な健康という観点から、イベントに「癒し」を求め、気分の改善を期待していると図表1および図表2から考えられる。さらに実際にイベントに参加して気分が有意に改善したことが報告<sup>7)</sup>されていることから来場者には満足感が得られたと十分に推察でき、リピーターとなる要因としての効果が期待できる。

また、イベントの主催は第三セクターであるが実施するにあたっては、多くの地域住民がボランティアとして交代で運営に携わっており、このボランティアがきっかけで異業種の地域住民の交流がうまれている。したがって、観光による交流人口だけではなく地域住民同士のあらたな交流のきっかけにもなっていると考えられた。

## 5. まとめ

ビーチサイドドルフィン開始後に海水浴場の利用者数が増加した。これには参加者がイベントに癒しといった気分の改善を期待し、それが満たされたことが要因と思われた。本調査では来場者に対して再来訪者であるかどうかの確認ができていないため、今後は再来訪者に焦点をあて要因をより明確にしていくことが求められる。また、まちづくりには単一領域からの観点からではなく複数の領域と連携し調査することが必要である。そして、再来訪にいたる要因を明確にしてより多くの人にアピールすることが交流人口確保につながり、よりよい地域振興が可能になると考えられる。

## 謝辞

本調査にあたり快くご協力いただいた田辺市の皆様へこころより感謝申し上げます。

## 〔参考文献〕

- 1) 日本観光協会：観光の実態と志向〈平成21年度版〉第28回 国民の観光に関する動向調査、日本観光協会、2010
- 2) 山口一美：観光地における再来訪を促す要因の検討—長野県小布施町に焦点を当てて、生活科学研究、Vol. 34、Pp. 59-69、2012
- 3) 独立行政法人労働政策研究・研修機構 職場におけるメンタルヘルス対策に関する調査、JILPT 調査シリーズ No. 100、2012 <http://www.jil.go.jp/institute/research/2012/documents/0100.pdf> (2018年3月23日参照)
- 4) 今野洋子、尾形良子：大学祭における「猫カフェ」の効果—「猫カフェ」体験型のAAE(動物介在教育)が来場者に及ぼす影響、北翔大学北方圏学術情報センター年報、Vol. 1、Pp. 1-10、2009
- 5) 太湯好子、小林春男、永瀬仁美、他1名：認知症高齢者に対するイヌによる動物介在療法の有用性、川崎医療福祉学会誌、Vol. 17、No. 2、Pp. 353-361、2008
- 6) 川乗賀也、堀内聡：ドルフィンスイムに伴う気分の変化、ストレスマネジメント研究、

川乗賀也・相良陽一郎：イルカ介在活動を通じた癒しのまちづくり

Vol. 12、No. 2、Pp. 82-86、2015

- 7) 堀内聡、川乗賀也、小松裕恵：イルカの観察、イルカへのタッチ、およびイルカとの遊泳に伴う感情の変化、感情心理学研究、Vol. 25、No. 1、Pp. 12-16、2017

(2018.9.11 受稿, 2018.10.3 受理)

〔抄 録〕

人口が減少していく中で、まちづくりに重要と思われるのは安定した交流人口の確保が1つの対策であると考えられる。本調査では過疎に悩む和歌山県田辺市でのイルカとのふれあいを目的とした夏季イベントであるビーチサイドドルフィンに注目し再来訪につながる要因について検討した。結果、来場者はイベントに癒しという気分の改善を期待し、参加することによって実際に気分が改善していることが推察された。イベント会場である海水浴場には平成17年のイベント開始より有意に来場者が増加しており、イベントが再来訪の要因であることが考えられた。持続可能な地域振興には再来訪要因を明確にする必要がある。